

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成15年
6月号

毎月23日発行
通巻394号
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成15年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



ジョン万次郎のふるさと、足摺岬 奈良市 和田 保さん撮影

第14回大倭会文化講演会

日本人の努力のかたち (最終回)

於 大倭紫陽花邑拝殿 平成14(2002)年11月10日

講師 鶴見俊輔氏

過去に遡る力

話が飛ぶようですが、——もうろくしていると思われるかもしれませんが、確かにもうろくはしています。それは認めますけどね(笑)——『ランチの女王』っていう、テレビを観ていたんですよ。観ました? あれはね、二十二歳の女のウエイトレスとやはり二十二歳の若いコックがいるんですよ。若いコックが、その二十二歳のウエイトレスが好きになつてね、外に呼び出すんです。そして、ぎゅつと抱きしめてキスをするんですよ。そうすると、その若いウエイトレスは目をかっとな開いて、ただ抱擁されるままになつているんです。ここんとこすごいですよ(笑)。

ある数秒間が経つと、ぱつと振り払つてね、バーツと駆けていくんです。五十メートルくらい全速力で駆けていくんです。そして、五十メートル行くと、くるつと身を翻して、もういつべんバーツと駆けて来るんです。で、呆然と立っているその若いコックの、胸に頭突きをダーンと食らわす。すると、その若いコックは、ステーンとひっくりかえっちゃつて、ね、コンクリートに背中を打っちゃつて、もう起き上がれないんですよ。

私は感心したね。自分の学問の方法を伝授された、と思った。もうろくで、話をしていと思うっておられるかもしれないが、今まで私が話してきたこととつながってるんですよ、これ。ぎゅつと抱きしめられた時に、二十二歳の娘にと

って、二十二歳の男性の方が力があります。そこでジタバタしないんです。ただ、かつと見開いているんです。パツと振りほどくと、ダーツと逃げるかに見えて、時代を遡行していくんです。で、五十メートルのところまでくるとひっくりかえって、パーツと現在の地点まできて、ダーンと頭突きを食らわす。

現在と取り組むというのはね、現在の権力武力、アメリカに抱擁されていてどうにもならないですよ。今の政府だって相当な武力を持っていますよね。だが、今の政府も文部科学省も、あらゆる官僚、外務省も、百五十年前に遡ることはできません。その時、日本は偉大な力を持っていたんです。そうでなければ明治維新はありません。だから、明治維新以後、官僚はね、明治以前は野蠻だったみたいなことを盛んにヨーロッパに言ったんですよ。それは、嘘なんです。明治人の自分を偉大にしたいと思わせるだけなんです。

R・P・ドアっていうイギリスの学者がいて、『江戸時代の教育』っていう本を書いている。彼の考えでは、一八五〇年ぐらいの同時代のイギリス・フランスと比べてみて、日本の民衆は読み書き能力と、算数、つまりそろばんですね、この二つについて決して勝るとも劣らない。そういう教育が既になされていたんです。それが偶然に別の光を与えられたので、明治維新以後のものすごい躍進がありえたわけです。

だから、どのようにわれわれの過去に遡っていくかの力が求められるんです。別に、日本人が遺伝子において劣っているわけではないんです。全くそんなことに劣等感を持つ必要はないんです。だって、江戸時代にですね、既に大阪に私塾の懐徳堂などがあって、富永伸基なんて十七、八歳の商人の子がこんなことを考えたんですよ。「どう

してこんなにお経がたくさんあるのか。違うお経に違う坊さんがいるんだ」と。単純に彼は考えたんですよ。二千年前の、ゴータマブツがそんな違うお経をいろいろ与えたわけではない。そうしたら、あとは坊さんが作ったんだ。何のためにと言うと、それぞれ食うために、商売として。それ、正解でしょう。そういうことを考えて、仏教について儒教について神道について、全部当てはめて考えたんですよ。こんなこと、世界の哲学者で他の人考えていないんです。したがって、富永伸基は世界の哲学者の中の非常に傑出した哲学者ですね。十七、八歳で考えた。だから死んじやっただけれども。

ジョン万次郎の偉大さ

もう一人、別の人を考えてみましょう。万次郎っていう人間は、十四歳で暴風雨に遭って流されて、無人島でアメリカの捕鯨船に拾い上げられた。万次郎、小学校行っていないよ。小学校なんてないんだから。何にも学校行っていないよ。けれどもその後、タダめし食わしているわけにはいかなないから調理の手伝いをやらせたり、船の帆げたの上げ下げを手伝わせたりしていると、船長は見えてね、これは非常に力があると思っただんです。その十四歳の少年だけを東部に連れて行くんです。東部に連れて行くとな、自分の家族に紹介した。日曜日、教会に連れて行くんですよ。すると、教会ではね、ここは白人だけ入れる、有色人種は教会に入れることはできないと言われる。そうすると、船長はね、それじゃあ私はもうここへ来ない、と出ちゃうんですよ。また別の教会に行つて、また断られるんです。また別の教会に行くんです。また断られるんです。その時、万次郎は一緒に歩いているんですよ。だから、万次郎は船長がどう

いう考えを持つているかわかるわけですね。仕舞いに入れてくれるところがあって、その教会に行き、それからその学校に行くんです。

で、学校行つても余力があるもんだから、桶屋さんに行つて、余分な時間で桶、曲がり物を作る修業をする。なぜ桶屋に行つたかと言つてですね、彼はお母さんがいる日本に帰りたいと思つているんですよ。その時、お父さんつて言わないのが微妙だね(笑)。日本に帰れば、首を切られるかも知れないんですよ。けれども、帰りたい。桶屋の仕事をして、金を貯めてね、捕鯨船に乗せてもらつて、日本の近くで降ろしてもらいたい。それで、始めに捕鯨船に乗り込んだ時はね、「桶の修理ができます」と言つたにもかかわらず、桶の修理について余分の賃金は払つてくれない。ごまかしているわけですよ。これは不当ではないかと、彼はすぐ降りちゃうんですよ。だから、契約の問題についても非常に明るくなつていっているんですね。もう大変な実力です。それで、捕鯨船に乗ると、実力でね、副船長まで選挙されるんですよ。大変な力ですね。

彼は金を貯めるためにね、ちやうどゴールドラッシュが起つたんで、金鉢に入つて金を掘るんですが、金を掘るのは機械掘りの方がいいと考え、始めはぐつと投資して、機械を買つて機械掘りにする。普通、金が貯まったらね、アメリカと日本では生活水準がうんだから、酒飲んだり女性と一緒にいたりして使うのが当たり前でしょう。そうじゃないんですよ。彼は日本に帰るんですよ。首切られるかもしれないけど。「日本の国策そのものが間違つているし、変更しなくてはいけない。開国すべきだ」つて考えたんですよ。それで、沖繩のそばに行つて、降ろしてもらつて帰つたんですよ。

それが万次郎です。そこまでの行状をとつても、ものすごくえらい人だということがわかるでしょう。だけど、よくぞ、その船長が彼の能力を認めたと思う。彼が日本に帰ってきてから、船長に書いた手紙が残っているんですよ。船長は、命の恩人ですよ。ひざまずいて、ひれ伏して当たり前なんです。だけど、そういうことをしたら船長が喜ばないというところまで、教会に連れていってくれた時の関係でわかつているわけですよ。十四歳で。人間は対等のものだと。その手紙の始まりがね、「ディアフレンド||親しい友よ」。船長に向かつて。すごいと思うね。これは偉大な人ですよ。鎖国時代の生んだ人。小学校へも何も行っていないんだ。

それ考えるとね、日本人はそれほどたいしたことをしていないんだが、でもそれは生物学的に劣っているためではないんですよ。でも、明治以後の百五十年を考えると、相当まずいことをしているね、日本人は。

私が作ったんじゃないやなくて、私が長田弘から聞いたことわざなんだけどね、長田弘が作った。「成功は失敗の元」。これはいい格言ですよ。黒船以後、本当にお手本なしでもがいて、明治維新、明治の革新をやつて、とにかく一九〇五年まではものすごいことをやつたんです。世界史に他に類例がないほどの大きな勝負ですよ。だけどこの成功が仇になったんだ。一九〇五年以後はもう失敗続き。大体、百年の失敗。これからも続きますよ。簡単に直るものじゃないよ、そんなもの。

この失敗続きの時に、自分は何をやるか。それを考える時なんです。万次郎は一人でやつた。一九〇五年以後の時代にも、一人でやつた人はいらぬです。またこの失敗は続くんです。絶対、ひつくりかえすことはできないけど。

残像のある人たち

こうして生きてきた中でね、私は「交流の家」の運動にきつかけがあつて出会つた。ハンセン病のことはこれで、五十年年ですか。これは、私にとつては重大なことだつたんですよ。どうして重か。銅貨の裏表の話をしたでしょう。この一般社会では一年生より二年生が上、三年生が上、東大出が一番えらい。給料やなんかでも、官僚でも、東大出が上に行くんですよ。

けども、たとえば、志樹逸馬という小学校六年で療養所に入った少年のことを考えます。強制隔離は間違いだつたけれども、ハンセン病の社会では子どもまで隔離されたんです。志樹逸馬は療養所に入れられてから、文学の好きな先輩がいて彼に本を読むことを教えてくれた。先輩はことごとく死んでしまつた。彼は教えられて図書館に通つて、日本語訳されたタゴールの詩集が好きになつた。彼の詩風は珍しくタゴール風なんです。ところが、一般社会の方では「タゴールは駄目」ということになつていまして。なぜかつて言うと、タゴールは日本に来るまで人気があつたんですよ。有色人種で最初にノーベル賞取つたんですから。日本に来てからね、「日本は帝国主義の道を歩んではならない」と言つて、これで評判を落としてしまつた。それで、タゴール読む人が少なくなつちやつた。殆どいなくなつちやつた。だけど、ハンセン病の図書館には、タゴールの日本語訳が残つていた。志樹逸馬はそこでタゴールの詩集を読んで、一般社会と全く違う、同じ日本語で書いていてもタゴールの詩風を受けた哲学的な詩を書き続けたんです。

これは殆ど松下村塾みたいですね。彼に文学を教えてくれた先輩はほとんど死んでいつたんで

す。彼は生き残つた。先輩のことを考えると、自分がどうして詩を書くようになったか、そこがすつきりした。一年生より二年生が上、東大が一番上つていう外の制度とはぜんぜん違う教育制度です。これはもう殆ど吉田松陰の松下村塾みたいなものですよ。これは強制隔離の九十年の中にあつたんですよ。今の日本の一般社会は金一元主義でしょう、それとは全然違いますよ。

私は、ハンセン病文学全集で子どもの巻を担当したんですが子どもの巻でこういうのがあつたんですよ。子どもがいよいよ家を出て、療養所に行く。朝起きてお父さんの部屋に行くと、お父さんはまだ寝ていた。起こしてはいけな思つて、外へ出て、便所の中に入つて泣きに泣いた。それからもう一度お父さんの部屋へ入つた。出かきなきやいけない。大きな旅をして愛生園まで行くわけですから。お父さんが向き直つて、「おまえ泣いたのか」。そうすると娘は、小学校四年生なんですけどね、「いいえ、泣いてなんかいない、さつき転んだのよ」と言う。するとお父さんは、「そうか」と言うんですよ。ここには見え透いた嘘があるでしょ。嘘のやりとり。お芝居ですね。だけどこれは、舞台の芝居とかテレビとかいうより、下手な芝居が迫力があるんだ。自動車に乗つて愛生園まで行くんだ。お父さんが出ていって、それを娘が家の窓から見ると、外に出て泣いていた。

こういう残像がそこにあるところなのが、今の日本の一般社会とぜんぜん違うところなんです。自分の父母の像、家庭の像、ふるさとの像、一般社会の像。逆の場合もあるんですよ。小学校行こうと思つて友達の家へ行つたら、「もう家の子は学校行つたよ」。つまり、発病しているから一緒にさせたくない。その時の冷たい仕打ちね。故郷の一面としてこれは生涯忘れられませぬ。

そういう残像の残り方があるんですよ。一般社会っていうのは残像が残らないような人間になっちゃっているんですよ。ですから、ここでは別の人間形成がある。

一般社会は広告の社会で、広告っていうのはその商品を買ってもらうまでの間、十日かせいぜい一カ月保てばいい、そういう積み重ねですよ。広告中心の社会は、残像の薄い社会。しかし、同じこの九十年の隔離の中で作られた、ハンセン病の内部の文化は、残像の上に打ち立てられた文化なんです。だからここにたとえれば、北条民雄の『いのちの初夜』のように世界的な水準に達した驚くべきものが出てくる。つまり、富永仲基が出てきて、万次郎が出てくると同じような状況がある。これを記念したいと思うのが、ハンセン病文学全集なんですけどね。

この、残像のある人たちと、まだ強制隔離が成立しているその時代に接触した学生たちが、この大倭で働いた。このことは学生たちに何かをもたらしたことは確かです。その時代に接触があったんですから。

学生運動としても大変異質なものでしょう。この中で、日本の古神道というのは、この法主はそれを継いでいるわけですが、全く新しい育ち方をして、一種のルネサンスが日本の神道に対して起こった。これは、今アメリカはたまた一つの最強の帝国になって、「自分たちは十字軍だ」なんて、世界の思想を変えていこうとしているあのキリスト教と、この古神道とどちらが宗教性が深いんですか。私は、この一つの例の四十年間を考えてみて、「キリスト教に比べて神道が劣っているなんて到底言えない体験をした」と思いますね。そう思います。ですから、この場所は私にとつては忘れがたい、重大な場所なんです。

大倭会会長あいさつ

中西正和 私が大倭に寄せて頂くようになりましてから、交流の家、キャンパーの方々の足跡はいつも聞かせてもらってましたが、今日はまた鶴見先生からのお話で、なお心に沁みました。

この世に既に矢追日聖さんは居られませんが、大倭紫陽花邑は永遠に残りますように我々は努力しております。法主様が常におつしやつたのは、「仲良う暮らしや」「腹の立たん人間になりや」ということでしたが、私なんか、もう朝起きてテレビ見たら、世の中ばやきたおしてます。鶴見先生も、先程それに似たようなことをおつしやつたのかなと思います(笑)。

私は大正十五年生まれで、終戦の年に大学に入りました。終戦までは学徒動員で、戦闘機のエンジンを作り行っておりまして、機銃掃射も受けました。そういう青春時代は未だに私の頭にこびり付いておるんで、先生のお話を聞きながら、一度自分の頭を空っぽにせなあかん、あまりに思い込んでいるかなと思いました。どれが善で、どれが悪か、分かりませんけれども、その場その場で、自分で良心に照らし合わせて生きていくようにしたいと思います。

法主様はまた、あなたたちにつながるいろんな霊体が一緒にここに来ていて、いつもおつしやいました。こういうような会合があれば、亡くなった過去のキャンパーも必ずおみえやと思えます。そういうことを思いながら今日も眺めておりまして、その雰囲気非常に心和むものを感じました。この後は大倭会館で直会(なほくわい)がございます。時間の都合が許される方は残って頂きまして、当時のお話を聞かせてください。

今日は、本当にありがとうございました。

「隆家」の頃の法主 (3)

矢追 隆義

兄は日新商業での卒業を控え、大学の受験について随分悩んでいたらしい。父より聞いた話では私立の商業学校なので大学受験のための科目も少なく、就職のための実務教育を重点的に教える専門校で、大学受験者など殆どなかったとのことである。兄はこの時点で、郡山中学校不合格になったことを、つくづく残念がったと思う。

その当時、母は日蓮上人の大崇敬者であったらしく、みずからも大阪寺町の某寺院へ弟子入りし、修行していたとのこと、常々、家の宗旨に悩みを持っていらしたらしい。それは分家した当時、仏壇と共にもらった浄土真宗(門徒)西本願寺派の宗旨のことである。結局、打ち続く身内の不幸とも兼ね合わせ、父とも相談の上、日蓮宗に改宗をしたのだが、本家は怒って、うちの霊山寺裏の大共同墓地(従来の中町全世帯)への埋葬は今後一切認めない、墓参りも禁止すると言ったそうである。やむをえず、隣地所有者の観音院様に頼み、特別に墓地用地として購入し、墓石も移すことになったそうである。今では、そこで私有地である墓地を持つているのは、うち位であると聞いている。

話は少し横にそれたが、修行中の母も、長男隆家の大学受験には心配し続ける。ある日、寺の住職に相談したところ、日蓮宗がバックアップして設立された文科系の立正大学があり、さらには宗門に関係のある住職の紹介があれば、入学できる可能性も高いという話を聞く。早速、父や兄とも相談の上、東京品川大崎にある立正大学への受験手続きをとることになったとのことである。

鯨から始まった日米交流

——ジョン万次郎とその時代——

東京都 矢部 顕

● トム・ソーヤの時代

江戸時代末期の漂流者・万次郎の話をしませう。鶴見俊輔先生が少年向けに書いた本で『ひとが生まれる』（ちくま文庫）という本があります。5人の日本人の肖像を描いたものですが、そのなかの一人が「中浜万次郎」です。この章がいちばんいきいきと描かれているのは、先生自身の少年時代のアメリカ体験と重ね合わせられているからだ、という評価があります。

この本は、14歳で漂流した万次郎のことを鶴見先生が書いたものですが、鶴見先生は中学時代に不良少年で、3度学校を退学になり、怒った父親は15歳の彼をアメリカに放逐し全寮制の学校に入れたのです。

漂流した万次郎は、アメリカの捕鯨船に救助され、その後、船長の家で世話になり、学校に通うようになります。みなさんは『トム・ソーヤの冒険』（マーク・トウエイン）の物語はご存知でしょうか。漂流が1841年、救助した船が航海を終えてアメリカに帰還したのが1843年ですから、万次郎がマサチューセッツ州フェアヴェンの町で学校に通学していたころは、ミズーリ州セント・ピーターズバーグの町でトム・ソーヤが冒険にあけくれていた時とぴったり同じ時代なのです。

『トム・ソーヤの冒険』の一節に次のような個所があります。

「もうすぐカリフォルニアで大金鉱が発見され、ひとびとが西へ、西へと向かうゴールド・ラッシュの前夜。ここミズーリ州セント・ピーターズバーグは……」。

ゴールド・ラッシュは1849年ですから、その前夜ということで同じ時代だとわかります。西へ西へと向かった人々のことを「フォーティナイナーズ」といいますが、1849年だから「49ers」というのです。アメリカには、この名前のプロ・フットボールチームがあります。

万次郎もゴールド・ラッシュのとき、カリフォルニアに行っています。学校を卒業した後、捕鯨船に乗っていた時期もありますが、日本に帰還する費用を貯えるために、少しのあいだ、金鉱掘りに行きました。西部カリフォルニアに行くのには未開の中西部を徒歩か馬で陸路を行くか、あるいは、当時パナマ運河はありませんでしたから、海路で南アメリカ南端をぐるりと回っていくしかなかったのですが、万次郎は船で行っています。

当時のアメリカの地図を見ると、いまのアメリカとずいぶん違います。また東部あたりだけの国であったことがわかります。

● 万次郎の漂流

万次郎は14歳、土佐の漁師でした。漁にでていたとき風にあい、舵も帆も失い、小さな漁船はただ潮に流され漂流するのみでした。無人島に漂着したとき、船は岩にぶつかり壊れてしまいました。

通常、漂流したならば黒潮の流れで、北の方に流され、カムチャッカ半島のほうに漂着するのが多いのです。ロシアです。有名なのは、桑名（三重県）白子の港から江戸に向かった廻船の船頭・大黒屋光太夫です。漂流し、ロシアに漂着し、そこで大切に扱われエカテリーナ女王にも謁見しました。この人を主人公にした小説が『おろしあ国

酔夢譚』（井上靖）で、緒形拳主演で映画にもなりました。

ロシアは南下政策で日本と交易を求めていたのに、漂流民を大事にし、日本語学校の教師に用いたりしました。外国で一番早く日本語学校をつかったのはロシアです。

江戸時代に漂流が多かったのは、鎖国令で外洋を航海することのできる竜骨構造船を作ることが禁じられていたからです。

万次郎の漂流した年は、天候異変で潮の流れが通年と違っていたようです。だから、北に向かうことなく東に流され、いまの鳥島（当時は名前もついていない）に漂着したようです。

無人島（鳥島）で、救助されるまでの143日間生きていましたが、何を食料としていたと思いますか？ 釣り道具は船が岩にぶつかりくだけたときに失ってしまったのでした。ですから、魚を獲ることができませんでした。アホウドリです。この鳥は翼を広げると2mぐらいの大きな、しかし、のろまな鳥です。すぐ捕まえることができたのです。

● アメリカの捕鯨業の隆盛と日本の鎖国

万次郎がなぜアメリカの船に救助されたかというところ、鳥島のあたりまでアメリカの捕鯨船が来ていたからです。アメリカの周辺だけでなく、日本近海まで鯨を獲りに来ていたほど捕鯨業が隆盛をきわめていました。そのころ捕鯨業はビッグビジネスだったのです。

『モービー・ディック（白鯨）』（ハーマン・メルヴィル）という小説をご存知の方も多いと思います。当時書かれた有名な小説で、捕鯨基地・マサチューセッツ州ニュー・ベッドフォード港あたりで語り伝えられた大クジラの物語で、万次郎とともに暮らした捕鯨船員の肖像です。映画にもなっています。

アメリカでは鯨を食料にしていたわけではあり
ません。日本では鯨は食料のみならず、さまざま
な日用品をつくる材料にも使いましたが、アメリカ
は鯨油をランプやロークソクなど夜の明かりとして
使用していました。日本では明かりに菜種油を使
っていました。鯨油を採るために、1年も2年も
航海しながら捕鯨をしていたのです。日本の近海
まで来て、日本は鎖国をしていますから、水や
食料が欲しくても、港に入る事ができません。
ペリー率いる黒船艦隊が浦賀沖に来て（185
3年）、日本を脅かして開国を迫ったのはどうし
てか。その理由を歴史で教わったことあります
か？ 日本は鎖国をしていて世界の文明から遅れ
ている、と心配しての親切心で来たのでしょうか。
そんなことはありません。アメリカの捕鯨船の水
や食料のために港を開ける、と迫ったのです。い
わば脅かされて、翌年の1854年に日米和親条
約をむすびました。

つまり、鎖国をといて日米の交流が始まること
になったキイは、鯨なのです。

では、そのペリーが来た時、鎖国時代にあつて
日本に英語のわかる人がいたのか。通訳は誰がし
たのか。オランダ通辞はいたでしょう。

万次郎はそのときには日本に帰国（1851年
帰国）していました。江戸幕府は万次郎を通訳と
して採用しませんでした。なぜでしょうか。

1860年、日米通商修好条約批准書交換のた
め、咸臨丸がアメリカに向けて派遣されたときは
通訳として同行しています。咸臨丸の艦長は勝海
舟でした。船酔いでほとんど寝込んでいたので、
捕鯨船での外洋航海経験豊富な万次郎が操舵の指
揮をとっていたといえます。

● C. W. ニコルと鯨

『勇魚』（C. W. ニコル著、村上博基訳、文

芸春秋刊）という小説があります。勇魚（いさな）
とは鯨のことで、日本人の鯨獲りの物語です。時
代は幕末、フィクションですが万次郎も少し登場
します。ニコル氏は『勇魚』を書くために日本に
来た、といわれます。

彼は、日本にくる前（1966年）、カナダ政
府の監視官として、カナダ沖で操業する日本の捕
鯨船に乗り込んでいました。国際条約を守って鯨
を捕獲しているかどうか監視するためです。

鯨を射止めた日の夜、その船の船長は泣きなが
らひとり「五木の子守唄」を歌っていたそうです。
それを目撃したニコル氏は、鯨を殺しながらも愛
している日本人と鯨のつながりに深い関心を寄せ
たのです。日本に行つて、日本人と鯨について書
きたいと思つたのです。20年くらい前に読んだ
『庄司船長と五木の子守唄』というエッセイで知
りました。

近海捕鯨の町として有名だった和歌山県の太地
に1、2年暮らして、小説『勇魚』を書き上げた
のです。その後、日本に定住し、いまは信州・黒
姫に住んでいて、自然環境問題などでの発言や行
動で有名になっています。

作家という肩書きで、たくさんエッセイや小
説を書いています。歌もうたいCDも出してい
ます。彼のCDアルバム『SAILED DOWN THE
RIVER』のなかで、庄司船長のことを歌にして
「SHOJI SENCHO」という題名で日本語で歌つて
います。

● 万次郎の曾孫

1991年に日米両国で、万次郎漂流150周年記
念行事がありました。『In the Name of
Brotherhood (In the Spirit of John Man-
jiro)』という歌を「ブラザース・フォー」とい
うグループが、記念のために創作し歌っていたの

には驚きました。わたしが中学生のころに一世風
靡したグループだったからです。

1992年、わたしは万次郎の曾孫の中浜博さ
んという、名古屋でお医者さんをしている方とお
会いし、子どもたちに万次郎についての講演をお
願ひしたことがあります。

博さんのお子さんの5代目まで、ホイット・フ
ールド船長の家族の5代目まで、家族同士の
交流が続いているお話を聴いて感動しました。国
家の方向や政策は変わっていても、それよりも
強く変わらない人間の絆、万次郎と船長の友情
が、150年5代にわたつて連続と続いていることに
驚きをおぼえました。

● 南北戦争と『大草原の小さな家』

ゴールド・ラッシュで、多くの捕鯨船の船員た
ちも危険な海の上での仕事よりも金鉱掘のほうに
流れていきました。また、ペンシルベニア州で石
油の大油田が発掘されて（1859年）、明かり
の油は石油に代わっていったことよつて、捕鯨
業は急速に衰えていきました。

南北戦争（1861〜1865年）が始まると、
かつて、トム・ソーヤが憧れた蒸気船ビッグ・ミ
ズリー号の行き交うミシシッピ川は、武器や兵隊
の輸送船が往來するようになりました。その船は
すこし前までの捕鯨船でした。捕鯨業が衰退し、
船が余っていたのです。

みなさんがよくご存知の『大草原の小さな家』の
ローラ・インガルス物語は南北戦争直後です。
電気など無い開拓地とその時代、ローラの家の
カンテラは鯨油だったのでしょうか。もう石油だ
つたのでしょうか。

● 明治維新とグラバー

万次郎は日本に帰りたいとの思いをつのらせて
も、鎖国状態にあるため帰国は不可能でした。そ

れにもかかわらず帰国したのは、中国へ行く船に自分のボートともども乗船し、琉球の近くでボートとともに降ろしてもらって、ボートを漕いで琉球にたどり着きました。琉球で、薩摩で、長崎でと合計1年半にわたる取り調べをうけ、出入国の禁を犯したとして牢獄に8ヶ月も暮らします。

薩摩の開明派の大名・島津斉彬は外国の文明を知る良い機会として、万次郎から話を聞きます。

明治維新1869年の原動力は倒幕派の薩摩、長州です。南北戦争が終わり、使われなくなった武器は日本に運ばれ、幕府との戦いに使用されました。それを取り計らったのはグラバーです。長崎観光の名所・グラバー邸は有名です。単なる武器商人としてでなく、思想的に薩摩を応援しました。

グラバーの息子・倉場富三郎(日英の混血)は、トロール漁法などを導入し長崎の水産業の近代化に大きな貢献をした人です。5年ほど前、私の会社の先輩である定村忠士さんが、倉場富三郎を主人公にした戯曲を書き、『グラバーの息子』という題名で、米倉齊加年主演で公演されました。

富三郎は、長崎に水揚げされる魚の全てを、絵師を雇って精密な絵を描かせました。これは世界でも有数の魚類事典となったということで、グラバー邸に原画の一部が展示されています。この芝居を紀伊国屋ホールで観てのち、九州に赴任してからグラバー邸を訪れたとき、廊下の隅になにげなく飾られていた絵を見たときは感激しました。

●明治維新後の万次郎

土佐の漁師の少年・万次郎は姓をもつていませんでした。そのような身分ではなかったのです。ジョン・ハウランド号に助けられたので、ジョン万次郎と呼ばれ、帰国後、姓を持つことを許されたとき、いまの土佐清水市中ノ浜で生まれたので、中浜としたのです。

その頃の日本人としてただ一人、捕鯨船に乗って世界の海をまたにかけた経験をもっている万次郎は、世界全体を見ることのできた稀有な人物でありました。日本では学校にも通ったことの無い少年が、アメリカで数学、航海術、天文学などを学び、学校を卒業すると捕鯨船の乗組員となって世界を航海したのでした。乗り組んでいた船の船長にアクシデントが起きた時には、選挙で副船長にまで推薦されるほどの信頼される人物でした。

「かなながら」への道

林 修 三

「大倭の国」、なんと美しい響きを持った言の葉だろう。かつてそれは、北は若狭の国から南の熊野までの地域に実在したという。国祖クシイナダヒメノミコトと天津神の雄、スサノオノミコト。その天と地の体現者であるかのようなお二方からお生まれになった美しき人の子、ニギハヤヒノミコト。このお三方の指導の下、太古その平和境は実在したにちがいない。

時の波蕩(その三)

そして末世、私達が求めるべきは、この万古不易の理想郷以外にはない。そこに至る道が如何に遠く果かなものであるにしても、たとえ一歩の足跡でも、そこに向かつて印すべき時である。一人、人類のみが優秀な生き物であるという妄想の元に進んできた近代の人の歴史は、当然ながら今やあらゆる分野で破綻をきたし、この美しい星に住む多くの仲間達を

たがゆえでしょう。牢獄から出た後、地位こそ幕府直参や海軍教授所教授となり、明治維新後は開成学校(のちの東大)教授になったのですが、翻訳と通訳の仕事以外には用いられることがなかったといわれます。

「万次郎の漂流そのものが、日本国家の歴史からはみだす出来事だったが、帰国後の万次郎の生涯も、明治維新前後を問わず、日本の国家の制度からみれば、はみだした一人の人間の生涯であった。万次郎が漂流によって得た思想は、明治以後の日本の社会に生かされることになかった」と鶴見俊輔先生は書いています。

巻き添えにして破滅しようとしている。凡てのモノ達の独自性を見つめ、真の宇宙神の下には平等であることの、唯一の真理に目覚め、己一人で生きていくような錯覚を改め、大いなるものによって、多くのモノ達と共に生かされている己自身を自覚し、恐れ恐生(おそおそ)生きることが、「かなながらの道」である。

その真の意味での「かなながらの道」を指し示す中心地の一つこそは、「大倭神宮」である。遠くは長曾根一族の念い、近くは法主様のご著書『ながそねの息吹』に詳しい矢追家三世の願いは、今もそこに息づいて鎮まつている。荒唐無稽にも見える『ことむけやはす一・二』に表れた大倭神宮に関する法主の様々な記述も、まさに人心狂乱とし、神の裁きとしての天変地異を待つ二十一世紀初頭の世界には、絶望という名の底なし沼に落ち込もうとする人類に向かつて投げ入れられた一本の救いの綱にも思える。

目ある者は見、耳ある者は聞け。「大倭神宮」に太古から鎮まる「かなながら」への道を。

あじさい日記

5月11日 祝会。舞鶴の門河夕陽さんが初参加されました。
 5月15日 大倭神宮月次祭。雨のため社務所でのお参り。

大倭病院では恒例の看護のイベントを玄関前駐車場に於いて実施。小雨の中参加者は126名、6割近くが近郊の方です。スタッフは雨に濡れながらの測定、結果説明でした。

5月20日 大倭会文化行事で三重県の樺大神社と御在所岳を訪ねました。雨という予報でしたが好天気の内に参加者34名。行きバスの中で、文化行事の意

味について法主様の話された文章を湯浅芳郎さんが読んだり、また樺大神社は、古代より龍神信仰のあった山のかもとに猿田彦（佐田氏、この土地に元からいた一族のこと）をお祭りするようにになったもの、社殿の後ろの山を忘れないで下さい等

大倭も宿苑 夏まつり
 7月26日(土) 午後3時～
あすか町球場にて
 お問い合わせ 安宿苑事務局
TEL 0742-48-3221まで

と、杉本順一さんから話があたり、川端一弘さんからは御在所岳の植物の話の聞いたりして勉強をしました。

樺大神社では内拝殿に上がって一同で挨拶、愉快な神主さんには猿田彦さんの直系ではないか？と冗談も出ていました。

杉本さんは、「猿田彦命からオオヤマトヨリ グライガタマワリ……」と感応があった。慰霊の旅という文化行事の真意が受けとめられたと実感出来た瞬間であった」と。

写真は御在所岳山上、ちらほら咲きのシロヤシオの花（敬宮愛子様のおしるしだそうです）の前で。



5月23日 大倭大本宮月次祭。祭典後、微生物の研究者である五十嵐章さんにSARSについて話してもらいました。
 沼津市の気功療法研究家とい

う長谷川伸史さんが来邑。

5月24日 午後、「特定非営利活動法人(NPO)むすびの家」設立のための総会が行われました。その後、命日が近い元管理

人の飯河四郎さん他、交流の家に建設に係わって既に帰幽された皆さんを偲ぶ集いをしました。

5月26日 大倭病院の決算役員会が開かれました。

6月6日 大倭神宮月次祭。南足柄市の宮崎たか子さんが参加。夜、大倭会館で邑倭の会。法主様の奥津城整備についても話題とされました。

6月7日 6年目の田植えが行われ、20数人の参加者で順調に屋頂には終わり、宴会となりました。昇ちゃんも初めて田んぼに入り、小学生の中島安佐美・青山美子都ちゃんが終わりまで意外にがんばり、宴会途中からFIWCの宮田武宏君は就職の面接に向かいました。さわやかな天候でしたが、宴会の後片付け頃にぼつぼつと雷雨。

また、この日、東京の安部照美さんが来邑して一泊。

6月8日 祝会。春日作太郎（八王子市）・齋藤正宏（福井市）さんは田植えに引き続き、杉浩史さんは久しぶりに参加。

6月9日 大倭印刷(株)は、社員研修で大阪市内の印刷会社を見学、その後昼食会をしました。

5月2日 職員住宅雑子寮に竹

大倭安宿苑では

内洋子さんが子供さん2人と共に入居されました。

5月13日 新任職員研修会に15名が参加。各施設や大倭の他の事業所の見学もしました。

6月1日 大倭安宿苑卓球大会。今年は、有料老人ホーム「エステイムライフ学園前」(介護専用型)からの参加1名を迎えました。

6月7日 奈良県空調衛生工業協会約50名の皆さんがボランティア活動で、須加宮寮と八重垣園のエアコンフィルターの清掃等をしてくれました。

(菅原園)
 5月25日 奈良県心身障害者スポーツ大会に3名が出場。

(須加宮寮)
 5月25日 同じく6名が参加。メダルもたくさんもらって、楽しい一日でした。

(長曾根寮)
 5月15日 誕生会。最近は矢追美壽紀寮長手作りの押し絵のプレゼントが喜ばれています。

(八重垣園)
 5月18日 俳句の会。「澄みし池蛙とび乗る蓮の船」「五月晴れ胸ふくらませ旅に発つ」「ユビキタス老人泣かせ若葉雨」

▼矢部顕さんは昨年、博多から東京に転勤、今回の「風ぐるま」は東京発です。この機会に、これからは他の皆さんにも書いて

編集後記

頂ければと思っています。矢部さんは鶴見ゼミだったし、鶴見先生のジョン万次郎の話が同じ号になったのも、表紙を和田さんの足摺岬の写真で飾れたのもグッドタイミングでした。(春)

あんない

*月次祭(大倭神宮)
 7月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第四一六回祝会
 7月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
 7月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)
 7月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

お願いとよびかけ

法主様ご帰臨満10年を記念して大倭大本宮で計画しておられる法主様奥津城の整備造成に、何卒各人の分に応じご協力をお願いします。

大倭会会長 中西 正和

1. 奈良信用金庫 学園前支店 普通0302639
 □座名 大本宮特別整備基金 中西正和
2. 郵便振替口座 00900-6-241836
 □座名 大倭奉賛会